滋賀県埋蔵文化財地域展Ⅱ　米原市編

「道が交わるところ－役所と城」

主催：公益財団法人滋賀県文化財保護協会　　後援：滋賀県・米原市教育委員会

もくじ

●米原市の概要

●道の交わるところ－役所と城

プロローグ

Ⅰ部　古代編

①寺林遺跡・・・・・・・3
②北方田中遺跡・・・・・4
③菅江遺跡・・・・・・・5
④三大廃寺遺跡・・・・・6
⑤筑摩御厨跡遺跡・・・・7
⑥六反田遺跡・・・・・・8

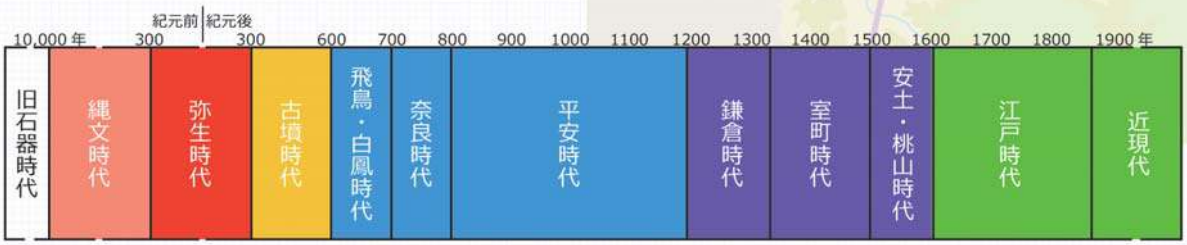
Ⅱ部　戦国時代編

⑦長比砦跡　・・・・・・9
⑧上平寺城遺跡
　上平寺館遺跡
　上平寺南館遺跡
　上平寺遺跡・・・・・10～11
⑨太尾山城遺跡・・・・11
⑩鎌刃城遺跡・・・・・12

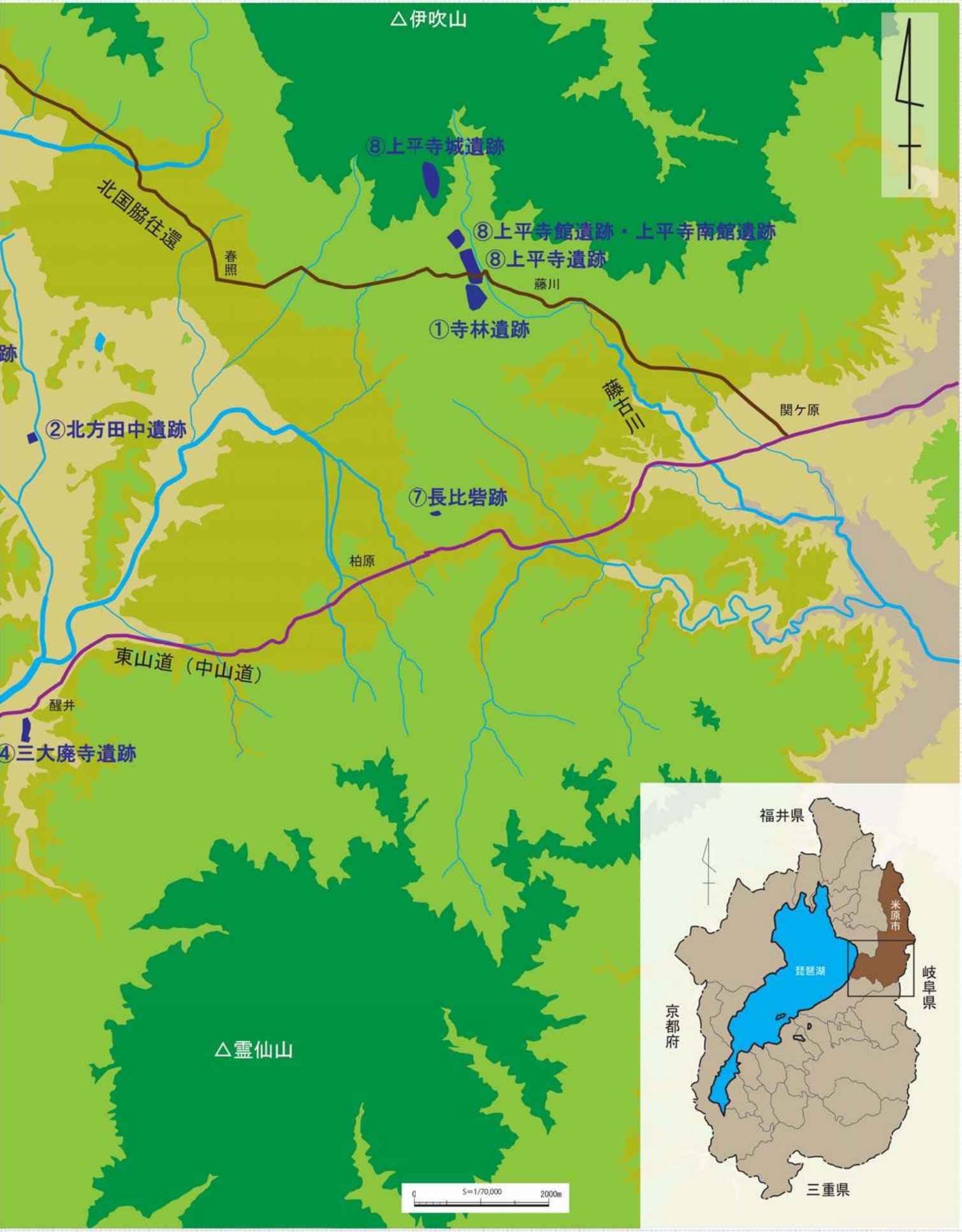
【出典・参考文献】

※遺跡の名称は『平成28年度滋賀県遺跡地図』に準拠しています

時代のめやす



＊本文では、遺跡のおもな時期



明を下の年表のとおり時代別に色分けしてしめしています

北近江の名門京極氏の本拠地

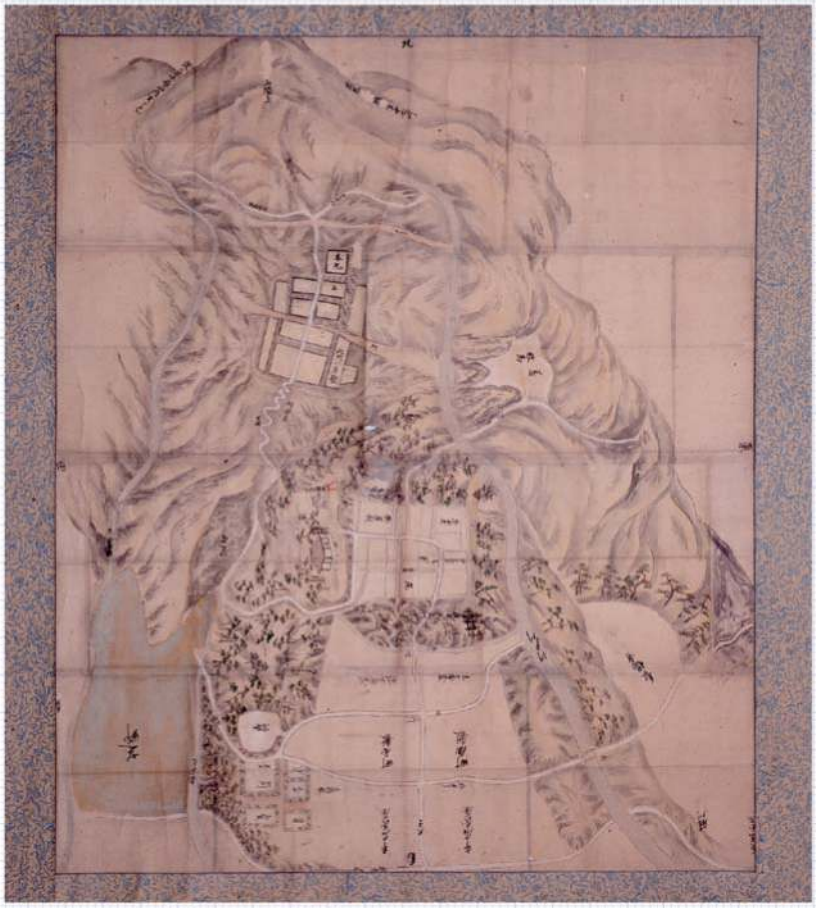
⑧上平寺（じょうへいじ）城遺跡・上平寺館遺跡・上平寺遺跡・上平寺南館遺跡

米原市弥高・上平寺・藤川地先

室町

◆調査主体・機関：伊吹町教育委員会・滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会

◆19 寺林遺跡から上平寺城を望む



◆20 上平寺城絵図（米原市蔵）

1.遺跡の概要

上平寺遺跡群は、詰城（つめじろ）である上平寺城（苅安城）とその山麓に位置する館・家臣団の屋敷から成ります。

城は現在残っている枡形虎口（ますがたこぐち）や高さのある土塁から、16世紀後半の浅井長政段階に築城・改修したものであると考えられています。

2.館と城下町

京極氏の拠点としていたのは上平寺館遺跡および上平寺遺跡・上平寺南館遺跡です。江戸時代の初めに描かれたと考えられる『上平寺城絵図』には

①「苅安尾・本丸」と書かれた上平寺城⇒上平寺城遺跡

②「ホリ」の内側の「御屋形・隠岐屋敷・弾正（だんじょう）屋敷」と書かれた京極氏の居館および重臣の屋敷部分⇒上平寺館遺跡

③「外ホリ」の内側の「諸士屋敷・町屋敷」と書かれた家臣団屋敷部分⇒上平寺遺跡

④「越前口道」（北国脇往還）沿いの「市店民屋」部分⇒上平寺遺跡

⑤画面左側の「若宮・加州・浅見・黒田・多賀・西野・上臈衆（じょうろう）・駒繁」などと書かれた重臣屋敷部分⇒上平寺遺跡・上平寺南館遺跡

が描かれ、注記されています。

絵図に描かれている平坦地等は、現地形と照合することができます。②で「御屋形」とある平坦

◆20 上平寺館遺跡　庭園跡

◆21 上平寺館遺跡　礎石建物跡

地の北側には「御自愛泉石」と書かれています。現地には、二つの池と大小100石近い石材が確認でき、庭園と考えられます。③は現在の上平寺集落、④は発掘調査が実施されており、当該時期の掘立柱建物や井戸等が確認されています。また、調査結果から城下町が「越前口道」（北国脇往還）の北側で収まっていたことが判明しています。

◆22 上平寺南館跡出土土師器

◆23 上平寺館遺跡出土竿秤錘（さおばかりおもり）

戦いを分けた城　室町

⑨太尾山（ふとおやま）城遺跡

米原市米原・西円寺地先　◆調査主体・機関：米原町教育委員会

◆24 南城跡曲輪Ⅱ溝の土師器皿出土状況

◆25 北城跡曲輪Ⅰ　礎石建物

1. 城の概要

史跡指定や活用を目指して、平成15年度・16年度に発掘調査を行っています。

標高254mの山頂から南に延びる尾根上に曲輪を配置しています。山頂部から南に雛壇（ひなだん）状に三段の曲輪を設ける北城と、堀切（ほりきり）を挟んで南に延びる尾根の先端部に曲輪を配置した南城からなるいわゆる「別城一郭」の構造を呈しています。

2. 調査の結果

南城部分では、礎石建物を２棟検出し、土塁は削り出して造られていることが分かりました。北城部分でも、礎石建物を２棟と石列が見つかっています。

遺物は少量ですが、輸入陶磁器、国産陶器、土師器等が出土しています。

国境要の城－堀氏の本拠地

⑩鎌刃（かまは）城遺跡　米原市番場地先

室町

◆調査主体・機関：米原町教育委員会

◆27 主郭虎口前面石垣と石段

◆26 主郭虎口前面石積

1. 城の概要

鎌刃城は、標高384mの山頂に造られています。当初、六角方の城として当地域の土豪であった堀氏により築かれたといわれています。のちに浅井氏に属し、『信長公記』によれば、元亀元年（1570年）の小谷攻めの際に堀氏が信長方に寝返ったことで、浅井氏と激しい地域の主導権争いが繰り広げられました。その後、堀氏が粛清（しゅくせい）される天正２年（1574年）頃まで城は機能していたと考えられています。

◆28 出土遺物（輸入陶磁器）

2. 調査の結果

調査の結果、16世紀の中頃を中心とした時期の遺構が検出されています。主な遺構として礎石立ちの櫓（やぐら）や門と考えられている礎石が見つかっています。また、主郭（しゅかく）は削り出しの土塁を備え、その内外面に石積みを施しており、後に登場する石垣の先駆的な様相を示していました。また、破城（はじょう）と考えられる遺構の破壊が城全体に見られることから、16世紀後半の廃城にともない意図的に取り壊したと考えられています。

遺物は、量は少ないものの輸入陶磁器、国産陶器、土師器、銭貨、碁石などが出土しています。釘が比較的まとまって出土していることから、本格的な建造物があったと推測されています。

◆29 出土遺物（国産陶器）

◆米原市の概要

滋賀県の東の端に位置する米原市は、平成17年（2005年）に近江町、山東町、米原町、伊吹町の４町が合併してできました。市域は約250平方キロメートル（琵琶湖を含む）で、人口が約39,000人です。市域の西側には琵琶湖、北側には伊吹山、南側には霊仙山、東側は岐阜県に接しています。

古代には東山道、近世には中山道、北国街道、北国脇往還（ほっこくわきおうかん）が通り、琵琶湖の東の玄関口である朝妻湊、米原湊がありました。現在においても、JR東海道本線、北陸本線、東海道新幹線、名神高速道路、北陸自動車道、国道８号、21号と西日本と東日本を結ぶ主要交通路が通過しており、交通手段が大きく変わった今も地域の重要性は変わりません。

◆プロローグ

『万葉集』で琵琶湖を「八十（やそ）の湊」「湖（みなと）は八十」「泊八十あり」と詠われており、琵琶湖には古代から「八十」=「たくさん」の港が存在していたことが分かります。現在では往時の３分の１ほどに減ってしまいましたが、湖岸部に内湖が発達していて、これらが天然の良港であったことが起因してます。

米原市は滋賀県の東の「玄関口」と表現しましたが、それは陸路だけではなく、琵琶湖を使った湖上路の「玄関」でもありました。その代表格が朝妻湊です。朝妻湊については、正確な場所については諸説ありますが、天野川の河口部付近であることは共通しています。八十の湊は内湖だけではなく、琵琶湖に流れ込む大小約460本の河川の河口部の入江や砂洲などの地形を利用していたと考えられています。朝妻湊は988年に記された『尾張国郡司百姓等解（おわりのくにぐんじじゃくしょうらげ）』の中に登場します。百姓らが尾張国の国司藤原元命（もとなが）が命じた、京へ物資を運ぶ際の労働条件があまりにも厳しいことを朝廷に訴える内容の中です。この中に尾張から京への物資の輸送ルートが書かれており、朝妻湊を経由していたことが分かっています。

◆01 入江内湖遺跡でみつかった丸木舟（４号丸木舟）

このような湊（港）として最適地であった朝妻は天野川の河口付近が想定されていることは前述したとおりですが、近接して、現在は干拓されて目にすることができない入江内湖がありました。この入江内湖では縄文時代の丸木舟が５艘みつかっています。このことからも地域一帯が古くから湊（港）として最適であったことを示しています。

◆第Ⅰ部　古代編

古代の米原市域を舞台とした歴史上の出来事の一つに、古代最大の内乱壬申の乱があります。

『日本書紀』によれば、672年の6月に大海人皇子（おおあまのおうじ）（のちの天武天皇）は吉野から脱出し、伊賀、伊勢、そして美濃国不破に至ります。そして、7月2日に近江朝廷側に総攻撃を命じます。大海人軍は東軍（不破から東山道ルート）、南軍（伊勢から大和へ）の2方面から大津宮を目指します。東軍は7月7日に「息長横河（おきながのよこかわ）（米原市）」、9日に「鳥籠山（とこのやま）（彦根市）」、13日に「安河浜（やすかわのほとり）（野洲市）」での激戦を経て、22日に近江朝廷軍の主力を「瀬田」で打ち破り、大海人軍の勝利が確定します。

この東軍の進路をみていくと、不破（現在の岐阜県不破郡関ケ原町）から東山道を西進していきますが、途中、「玉倉部邑（たまくらふのむら）」で近江朝廷軍を撃退しています。それとは別に、近江朝廷方であった羽田公矢国（はたのきみやくに）が大海人軍に投降し、その後、大海人軍として越前から近江に入り、近江朝廷軍の拠点である三尾（みお）城（高島市）を突破して南下しています。

これらの大海人軍の進路であった「息長横河」「玉倉部邑」、そして羽田公矢国が越前へ抜けるルートの舞台は現在の米原市域であったと考えられます。

そのルートを、古代の遺跡を概観することにより追体験していきます。

峠の集落－美濃と北近江、越前を繋ぐ道

①寺林（てらばやし）遺跡　米原市藤川地先

奈良
平安

◆調査主体・機関：滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会・伊吹町教育委員会

◆02 検出された掘立柱建物

1.遺跡の位置

寺林遺跡は、藤古川によって形成された扇状地に位置し、水平距離で800m足らずで、比高が25mを測るような、非常に高低差がある斜面地です。近世の北国脇往還に隣接しています。

2.遺跡の概要

調査では、縄文時代から安土桃山時代の遺構がみつかっています。

その中で注目するべきは、8世紀代を中心とした集落です。掘立柱建物が8棟みつかっています。

3.どのような集落か？

寺林遺跡が立地する地域は耕作地として適しておらず、あえてこの地域に集落がある理由は美濃と北近江、北陸を結ぶルートであることが関連していると考えられます。生業と一体ではなく、道を管理するような役割を担っていたのではないでしょうか。羽田公矢国もここを通ったかもしれません。

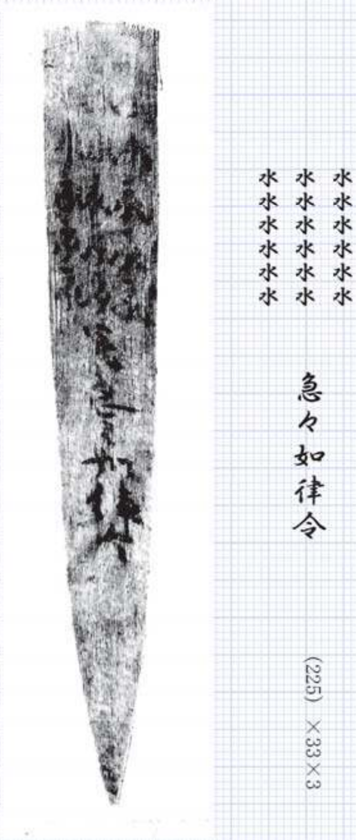
横山丘陵の生産管理集落

②北方田中（きたがたたなか）遺跡　米原市北方地先

奈良
平安

鎌倉

◆調査主体・機関：滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会



◆03 井戸から出土した呪符木簡（鎌倉時代）
井戸の中に水が素早く満ちるように祈願したと考えられます

◆04 調査地全景

◆05 溝から出土した須恵器

1. 遺跡の位置

横山丘陵の西側、天野川の支流である黒田川沿いに位置しています。

2. 遺跡の概要

掘立柱建物が十数棟、四脚門、井戸、道路状遺構等がみつかっています。

出土している遺物から奈良時代の後半代から鎌倉時代に機能していたことがわかりました。

3. 遺跡の特徴

北方田中遺跡は、生産遺跡（須恵器窯等）が複数存在している横山丘陵に隣接しています。出土した遺物の量的には８世紀後半代が中心で、その内容も須恵器、畿内系暗文（あんもん）土師器、円面硯と公的機関色が濃く、横山丘陵に展開している生産地を管理していた地域の拠点集落と考えられます。

横山丘陵の須恵器生産地

③菅江（すえ）遺跡　米原市菅江地先

奈良
平安

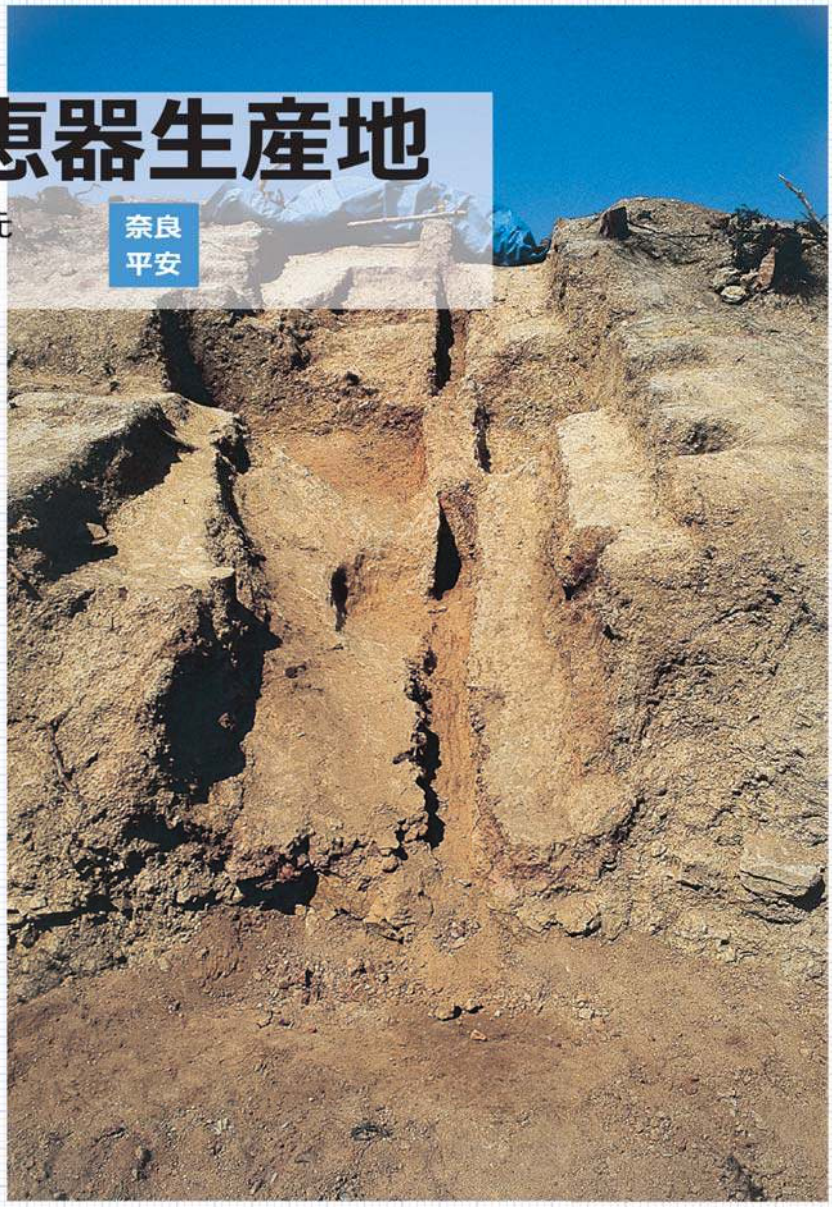
◆調査主体・機関：山東町教育委員会

1.遺跡の位置

横山丘陵の東側に派生する丘陵の南側斜面に造られた須恵器の窯です。

2.遺跡の概要

昭和61年に民間の土砂採取工事に伴い調査を行いました。調査では窯体1基（1号窯）と灰原（はいばら）が2ヶ所でみつかっています。みつかった窯は半地下式の登窯で、天井部および焚口、前庭部が壊れているものの、残存長4.4m、最大幅が1.5mを測ります。窯で焼かれていた須恵器は灰原を中心に出土しています。8世紀中ごろを前後する時期で、2か所の灰原の時期差はみられないことから、同時期に2基以上の窯が稼働していたと考えられます。



◆06 1号窯

◆07 灰原からの出土遺物

「息長横河」の寺

奈良
平安

④三大廃寺（さんだいはいじ）遺跡　米原市枝折地先

◆調査主体・機関：米原町教育委員会・滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会

◆08 出土した軒瓦　天武天皇が建立した本薬師寺と同型式の瓦が見つかっています（写真上中段最左）。壬申の乱時の東山道沿いの激戦地には、天武天皇と所縁のある本薬師寺や藤原宮と関連のある瓦を用いた寺院がみつかっています。

◆09 基壇跡　基壇は寺院に伴うもので、後世の耕作で削平を受けているものの、大きさは東西 24m、南北 21m、高さ 40 ～ 60 ㎝を測ります。

1. 遺跡の位置

遺跡が所在している地域は、壬申の乱で登場する「玉倉部邑」や「息長横河」に該当すると考えられています。

2. 遺跡の概要

瓦が付近一帯で拾われており、明治 36 年の旧醒井小学校の増改築時には多量に瓦が出土していることから寺院の存在が想定されていました。昭和 57・58 年の２ヶ年にわたり、水田の区画整理にともなう調査が行われました。調査では、掘立柱建物や竪穴建物、基壇（きだん）がみつかりました。出土している瓦類や土器から８世紀初頭には廃絶したと考えられます。

琵琶湖の幸を都へ

奈良
平安

⑤筑摩御厨跡（ちくまみくりやあと）遺跡　米原市朝妻筑摩地先

◆調査主体・機関：米原町教育委員会

◆10･11 須恵器の杯の底部に残る墨書（写真左・中）
「月足」の文字が書かれています。

◆12 神功開寶（写真右） 皇朝12銭（古代に造られた国産銭貨）の一つです。

1. 遺跡の位置

入江内湖と琵琶湖の間に形成された砂州上に立地します。古代の琵琶湖は内湖が天然の港として機能していたことから、入江内湖周辺を朝妻湊であったとする意見もあります。

2. 遺跡の概要

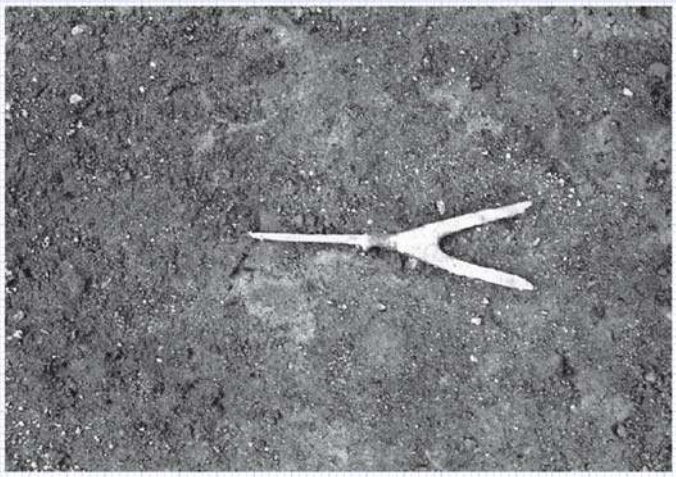
当遺跡が所在する地域に、『類聚三代格（るいじゅうさんだいきゃく）』の延暦19年（800年）の太政官符（だいじょうかんぷ）に記載が見られる「筑摩御厨」があったと考えられています。

御厨とは、天皇家をはじめとして中央の有力貴族に魚介類を貢進するための所領のことで、『延喜式』によれば「筑摩御厨（ちくまのみくりや）」の貢進物は、醤鮒、鮨鮒、味塩鮒であったことが分かっています。ここから、都に琵琶湖の幸が届けられたのです。

調査では、明確な遺構は検出されなかったものの、遺物包含層から8世紀末から9世紀初頭、10世紀後半代の2時期の遺物が出土しています。遺物の中には墨書土器（写真10･11）や畿内系暗文（あんもん）土師器、須恵器の特殊な壺等が含まれており、公的な施設であったことを示しています。

このような調査成果と文献の内容から、平安時代初頭には近辺に「筑摩御厨」が存在していた可能性が想定できます。

◆13 刀子・鎹（かすがい）の出土状況



◆14 雁股鏃（かりまたぞく）の出土状況

古代の川津

奈良
平安

⑥六反田（ろくたんだ）遺跡　彦根市鳥居本町地先

◆調査主体・機関：滋賀県教育委員会・公益財団法人滋賀県文化財保護協会

◆15 見つかった川跡

◆16 川跡出土木簡

◆17 川跡出土遺物

1. 遺跡の位置

近世の鳥居本宿の西側、石田三成の居城として有名な佐和山城の東側に位置します。

古代の官道である東山道で東国から来ると、磨針峠（すりはり）を越えて平野部に入った地点になります。現在は、彦根市ですが、古代の坂田郡域になります。

2. 遺跡の概要

発掘調査では、7世紀後半代と8世紀後半から9世紀初頭の川跡がみつかりました。川跡からは木簡や人形代（ひとかたしろ）などを含めて大量の遺物が出土しました。

木簡は文書木簡、荷札木簡、習書（しゅうしょ）木簡がみつかっており、それらの内容から当遺跡が公的な施設であったことが明らかとなりました。また、出土している土器は、当時の都で使っていたものと同様の組合せで、畿内系暗文土師器も多量に見つかっています。

3. 遺跡の性格

遺跡の立地や出土している遺物の内容、文字資料（木簡・墨書土器）などから、陸路と湖路にアクセスする拠点におかれた役所であると考えられます。

◆第Ⅱ部　戦国時代編

戦国時代の米原市域の歴史上の大きな出来事の一つは、織田信長 × 浅井・朝倉の戦いの前哨戦の舞台になったことです。米原市域は、戦国時代においても東国から幕府があった当時の中心地京都へ向かうためには通らなくてはならない場所でした。当然、信長にとっても本拠地岐阜城から京都に上洛するルートとして最重要地域であったのですが、永禄 13 年（1570 年）に妹お市を嫁がせていた浅井長政が信長に反旗をを翻（ひるがえ）すことになり、この地の勢力を掌握するために長政との対決が不可避となりました。『信長公記（しんちょうこうき）』には

「さる程に、浅井備前、越前衆を呼び越し、たけくらべ・かりやす、両所に要害を構え候。信長公御調略を以て、堀・樋口御忠節仕るべき旨御請なり。六月十九日、信長公御馬を出だされ、堀・樋口謀叛の由承り、たけくらべ・かりやす、取る物も取り敢へず退散なり。たけくらべに一両日御逗留なさる。」

「五月六日、浅井備前、あね川まで罷り出て、横山へ差し向ひ、人數を備へ居陣候て、先手足軽大将浅井七郎、五千ばかりにて、みのうら表、堀・樋口居城近辺に相働き、在々所放火候。」

と書かれ、元亀元年（1570）の６月上旬に長政が、越前（朝倉氏）の軍勢を呼び寄せて、たけくらべ（長比砦）・かりやす（上平寺城）を整備して信長勢を迎え撃つ準備を進めていました。しかし、この両城の守備を担っていた堀秀村・樋口直房の両氏が信長方に寝返ったことで、信長は２城を労せずして手に入れることができたとあります。

また、その後、元亀２年（1571）の５月６日には、浅井長政が姉川まで進出し、五千ほどの兵で堀・樋口の居城近くまで攻め寄せ、村々に放火したとも書かれています。堀・樋口の居城とは鎌刃城を指していると考えられています。

このようにの信長 × 長政の戦いの序盤戦は、米原市域を舞台に繰り広げられ、その後、ところを変えながら、天正元年（1573）の小谷城陥落まで続いていくことになります。

国境の城　室町

⑦長比砦（たけくらべとりで）跡

米原市柏原・長久寺

◆18 帯曲輪と土塁

1. 城の概要

東西二つの曲輪（くるわ）からなる城です。

発掘調査を実施していないため、現在確認できる遺構の年代については確定することはできません。曲輪ごとに造られた時期が異なり、後世に改修されている可能性が指摘されています。そのように考えると『信長公記』の記述に見られる元亀元年から関ケ原合戦までの幅が考えられます。

2. 城の特徴

この城の特徴は、近江と美濃を分ける国境の城であることです。古代東山道を見下ろす山の上に築かれており、大きな争いがあるときは、常にその最前線でした。そのため、その都度、必要に応じて改修がされたと考えられます。

【写真提供】
1～5・15～19・22　　滋賀県
6～14・20・21・23～29　米原市教育委員会

【参考文献】

◆寺林遺跡
・滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会 2000『寺林遺跡』
・伊吹町教育委員会 2001『上平寺遺跡・寺林遺跡』
・滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会 2003『上平寺遺跡・寺林遺跡』
◆北方田中遺跡
・滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会 1985「坂田郡山東町東良遺跡（北方田中遺跡）」『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書』ⅩⅡ－6
・奈良俊哉 1985「北方田中遺跡」『木簡研究』第7号　木簡学会
◆菅江遺跡
・山東町教育委員会 1986『菅江遺跡発掘調査報告書』
◆三大廃寺遺跡
・米原町教育委員会 1984『三大寺遺跡群』
◆筑摩御厨跡遺跡
・米原町教育委員会 1986『筑摩湖岸遺跡発掘調査報告書』
◆六反田遺跡
滋賀県教育委員会・公益財団法人滋賀県文化財保護協会 2013『六反田遺跡Ⅰ』
◆長比砦跡
・石川浩治 2014「野瀬山城・須川山城」『図解　近畿の城郭Ⅰ』戎光祥出版
◆上平寺城遺跡・上平寺館遺跡・上平寺南館遺跡・上平寺遺跡
・伊吹町教育委員会 1998『上平寺館跡』上平寺城跡遺跡群分布調査報告書Ⅰ
・伊吹町教育委員会 2000『高殿地区（上平寺南館跡）』上平寺城跡遺跡群分布調査報告書Ⅱ
・滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会 2000『上平寺南館遺跡』
・伊吹町教育委員会 2002『推定若宮・浅見屋敷跡』
・伊吹町教育委員会 2002『駒繋跡・杉本坊墓地』
・伊吹町教育委員会 2002『上平寺城跡－京極氏の山城跡』
・滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会 2003『上平寺遺跡・寺林遺跡』
・伊吹町教育委員会 2004『上平寺遺跡Ⅱ』
・米原市教育委員会 2005『京極氏遺跡分布調査報告書－京極氏城館跡・弥高寺跡－』
・中井均 2014「上平寺城」『図解　近畿の城郭Ⅰ』戎光祥出版
◆太尾山城遺跡
・米原市教育委員会 2006『米原町内中世城館跡分布調査報告書』
◆鎌刃城遺跡
・米原町教育委員会 2001『鎌刃城跡発掘調査概要報告書』
・米原市教育委員会 2006『米原町内中世城館跡分布調査報告書』
・中井均 2014「鎌刃城」『図解　近畿の城郭Ⅰ』戎光祥出版
◆その他
・坂本太郎ほか校注 1994『日本書紀』下　岩波書店
・桑田忠親校注 2002『新訂信長公記』新人物往来社
・滋賀県教育委員会 2003『北国街道・北国脇往還』中近世古道調査報告書6
・滋賀県教育委員会 2004『北国街道・北国脇往還（補遺）』中近世古道調査報告書7
・財団法人滋賀県文化財保護協会・滋賀県立安土城考古博物館・滋賀県立琵琶湖文化館 2005『聖武天皇とその時代』
・滋賀県教育委員会編 2006『近江城郭探訪　合戦の舞台を歩く』サンライズ出版社
・米原市教育委員会 2009『湊・舟、そして湖底に沈んだ村』
・米原市教育委員会 2010『天野川流域の古代寺院』
・米原市教育委員会 2011『京極家激闘譜－京極氏の遺跡、信仰、文化』
・米原市教育委員会 2012『東西の交差点・まいばら－文化は米原を通った！』
・太田牛一著・中川太古訳 2013『現代語訳　信長公記』KADOKAWA
・宇治谷孟 2015『日本書紀（下）全現代語訳』講談社
・米原市教育委員会 2018『米原の城－城のまちの戦国時代』

滋賀県埋蔵文化財地域展Ⅱ　米原市編
「道の交わるところ－役所と城」

2020年（令和2年）7月22日　発行
編集・発行　公益財団法人滋賀県文化財保護協会
〒520-2122　滋賀県大津市瀬田南大萱町1732-2
TEL　077-548-9780　/　FAX　077-543-1525

会場：滋賀県埋蔵文化財センター
会期：2020年7月23日～8月31日
主催：公益財団法人滋賀県文化財保護協会
後援：滋賀県・米原市教育委員会